



# 営農タイムリー！



## 発生予察情報について(7月)

2024年7月2日発行

### 病害虫発生予報第5号(7月)

京都府病害虫防除所より、7月の予察情報が発表されました。

#### 病害虫発生予察第5号(7月) (抜粋)

##### 予報の概要

作物名	病害虫名	予想発生量 (平年比(前年比))
イネ	葉いもち 紋枯病 セジロウンカ ツマグロヨコバイ 斑点米カメムシ類	多 (並) やや少 (やや少) 並 (並) 並 (多) 並 (やや少)
ズドウ	べと病	並 (並)
カキ	うどんこ病	やや少 (並)
果樹全般	カメムシ類	多 (多)
果菜類	疫病・褐色腐敗病 うどんこ病 アブラムシ類とモザイク病 アザミウマ類 ハモグリバエ類	並 (並) 並 (やや多) やや少 (やや少) 並 (やや多) 並 (やや多)
ウリ類	べと病 炭疽病	並 (やや多) やや多 (やや多)
キュウリ	斑点細菌病	やや多 (やや多)
ネギ	ネギアザミウマ と ネギえそ条斑病 ネギハモグリバエ	並 (やや多) やや少 (やや多)
野菜全般	ハダニ類	並 (やや多)

# イネ

## 1. 葉いもち

予報内容 発生量 : **平年比 多い** (前年並)

### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 補植用苗が葉いもちの発生源となるので、放置したままの苗は早急に  
抜取り処分する。
- (2) いもち病の発生は気象条件に大きく影響されるので、曇雨天が  
続く場合には注意する。
- (3) ほ場の見回りを行い、肥料がムラ効きしているところを中心に、  
下葉に発病していないかどうか調べる。特に多肥田や山間、山  
沿いの水田では注意する。



## 2. 紋枯病

予報内容 発生量 : **平年比 やや少ない** (前年比 やや少ない)

### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 分けつ期ころに水際の葉鞘に発生し、その後水平、  
上位方向に進展する。
- (2) 早植栽培で発生が多く、気温30℃前後で多湿条件が  
続くと多発する。
- (3) 出穂20日前の発病株率が20%以上であれば薬剤  
散布を行う。散布は発病部である葉鞘によく付着する  
ように散布する。なお、穂いもちとの同時防除を考慮する。
- (4) 昨年多発したほ場では、深水管理をしない。
- (5) 窒素肥料の多用を避け、過繁茂にならないよう施肥管理に注意する。



## 3. セジロウンカ

予報内容 発生量 : **平年並** (前年並)

### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 梅雨前線の活動が活発化すると多飛来することがあるので注意する。
- (2) 7月中旬以降、ほ場を見回り、株当たり10頭以上の発生を認めた場合は防除する。なお、  
幼虫は株元に生息しているので、薬剤が株元までかかるよう丁寧に散布する。





## 4. ツマグロヨコバイ

予報内容 発生量 : 平年並 (前年比多い)

### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 直接吸汁加害する他、萎縮病等を媒介する。



萎縮病

## 5. 斑点米カメムシ類

予報内容 発生量 : 平年並 (前年比やや少ない)

### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 稲穂を吸汁加害し、斑点米の原因となるカメムシ類には多くの種類がいるが、特に、カスミカメムシ類による被害が増加している。
- (2) 水田周辺のイネ科雑草の穂を餌にして増殖し、本田へ侵入するので、草刈りを行い、イネ科雑草の出穂を防ぐ。
- (3) 草刈りは出穂2～3週間前と出穂直前の2回行うと効果的である。1回で済ませる場合は、出穂10日前までに行う。なお、草刈り時期が遅れると逆効果になるので注意する。
- (4) 穂揃期と傾穂期の防除(共同、一斉)が有効である。
- (5) これまでに山城地域と丹波地域の一部でミナミアオカメムシの発生を確認している。本種は、他の斑点米カメムシ類に比べて体が大きく吸汁量が多いため、少数でも被害が大きくなるので注意する。
- (6) 近年、イネカメムシの発生量が増加している。他の斑点米カメムシ類と異なり、出穂期に水稻の籾の基部を吸汁すると、不稔籾を生じさせ、穂揃い期以降に加害されると籾の基部が変色した斑点米を生じ、等級格下げの原因となる。他の主要な斑点米カメムシ類と異なり、穂揃い期以降ではなく出穂期に防除することが重要である。

アカヒゲホソミドリ  
カスミカメ



アカスジカスミカメ



ミナミアオカメムシ幼虫



イネカメムシ



ミナミアオカメムシ



# 果 樹

## 1. フドウ ベと病

予報内容 発生量 : 平年並 (前年並)

### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 雨が多く、気温が低めに経過すると多発しやすい。
- (2) ハウス栽培では、過繁茂を避け通風をよくする。



発病葉 (葉表)



発病葉 (葉裏)

## 2. カキ うどんこ病

予報内容 発生量 : 平年比やや少ない (前年並)

### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 夏季の高温時には病勢が治まるが、冷夏の年は分生子の飛散が続き、発病が続く。



## 3. 果樹全般 カメムシ類

予報内容 発生量 : 平年比多い (前年比多い)

### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 園外から飛来して局地的に発生するので、特に山林などの隣接園では注意する。
- (2) ナシ、モモなどの無袋栽培やカキ、カンキツでは被害が多くなる。

チャバネアオカメムシ



ツヤアオカメムシ



クサギカメムシ



# 野菜

## 1. 果菜類 疫病・褐色腐敗病

予報内容 発生量：平年並（前年並）

### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 病原菌は水媒伝染するので、ほ場の排水に努める。特に、降雨時の地表水を速やかに排水する。
- (2) マルチを張り、泥によるはね上げ伝染を防ぐ。また、溝に落ちて浸水したと思われる蔓は摘除して、ほ場外へ持ち出し処分する。



トマト 疫病



## 2. 果菜類 うどんこ病

予報内容 発生量：平年並（前年比 やや多い）

### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 初発生時期が早いと多発し、被害が大きくなる。
- (2) 施設栽培で発生しやすく、高温乾燥が続くと発生が多くなる。
- (3) **トウガラシ類**では、**ハダニ類**による被害と判別が難しいので、被害葉を十分に観察する。



キュウリ



かぼちゃ



トマト

## 3. 果菜類 アブラムシ類とモザイク病

予報内容 発生量：平年比 やや少ない（前年比 やや少ない）

### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) **アブラムシ類**には直接吸汁加害するだけでなく、**モザイク病**を媒介するものもいる。
- (2) 通常、無翅虫で集団加害するが、密度が高まると有翅虫が現れて分散し、発生が拡大する。
- (3) 高温乾燥が続くと発生が多くなる。
- (4) **キュウリの急性萎凋症**の発生の多いところでは、**アブラムシ類**の飛来に特に注意するとともに、ワクチン苗の利用も考慮する。

モモアカアブラムシ

ダイコンアブラムシ



ワタアブラムシ



ニセダイコンアブラムシ



## 4. 果菜類 アザミウマ類

予報内容 発生量：平年並 **(前年比 やや多い)**

### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 直接加害するだけでなく、**ウイルス病**を媒介する  
**ミカンキイロアザミウマ**や**ネギアザミウマ**等の種類もいる。
- (2) ハウスや雨よけ栽培では**高温乾燥が続くと、特に多発しやすい**ので注意する。
- (3) ハウス内及び**ほ場周辺の除草を徹底する**。



## 5. 果菜類 ハモグリバエ類

予報内容 発生量：平年並 **(前年比 やや多い)**

### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 苗からの持ち込みを防ぎ、罹病株の残さは土中に埋めて処分する。施設栽培では、開口部に0.8mm目合いの防虫ネットを張る。
- (2) 黄色粘着ロールをハウス周囲及び開口部に展張する。
- (3) 発生を認めたら被害葉を取り除き、発生初期の防除に留意する。
- (4) 施設マルチ栽培では、マルチ上に落ちた蛹を掃き集めて処分する。



## 6. ウリ類 ベと病

予報内容 発生量：平年並 **(前年比 やや多い)**

### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 気温20～25℃で、曇雨天が続くと発生しやすい。
- (2) 肥切れしたり草勢が衰えると発病が多くなるので、肥培管理に注意する。





## 7. ウリ類 炭疽病

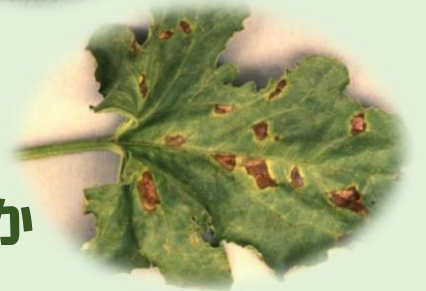
予報内容 発生量 : 平年比 やや多い (前年比 やや多い)

### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 気温22～24℃で降雨が続くと伝染、まん延しやすい。発病後の防除は効果が劣るので、予防、早期防除に重点を置く。
- (2) 種子伝染するほか、罹病株の残さ、資材等が伝染源となる。
- (3) 窒素肥料の多用は発病を助長するので注意する。
- (4) 夏秋作に発生しやすいので注意する。



キュウリ



すいか

## 8. キュウリ 斑点細菌病

予報内容 発生量 : 平年比 やや多い (前年比 やや多い)

### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 降雨等により病原細菌が飛散し、葉及び果実の気孔等から侵入して発病するが多い。
- (2) 曇雨天が続くと急速にまん延するので、気象の変化に注意する。
- (3) 多湿が発病を助長するので、施設では換気を十分に行う。
- (4) 発生してからでは防除が困難となるので、予防防除に努める。



## 9. 野菜全般 ハダニ類(チャノホコリダニを含む)

予報内容 発生量 : 平年並 (前年比 やや多い)

### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 主に葉裏に生息し、乾燥条件で発生しやすい。
- (2) 梅雨明け後急激に増殖するので、梅雨明け後の防除が大切である。
- (3) ハウス栽培では天候に関わらず発生しやすい。
- (4) ハウス内及びほ場周辺の除草を徹底する。



ナミハダニ



カンザワハダニ



チャノホコリダニ  
被害果実



## 10. ネギ ネギアザミウマとえそ条斑病

予報内容 発生量：平年並（前年比 やや多い）

### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) **ネギアザミウマ**は、年間10世代以上くり返し、葉の表層を食害し、かすり状の食害痕を残す。**ネギ**では葉鞘分岐部や葉折れの内側に多く寄生する。
- (2) 本種は、**ネギえそ条斑病**の原因となるアイリス黄斑ウイルス（Iris yellow spot virus: IYSV）を媒介する。
- (3) 薬剤散布の他、赤色系防虫ネットやUVカットフィルムによる物理的防除が効果的である。
- (4) 被害葉及び収穫残さが本虫の発生源となるので、残さは一箇所にまとめて積み上げ、表面をビニルで被覆する等適切に処分する。
- (5) 殺虫剤散布後は効果を十分に確認し、感受性の低下が疑われる場合は系統の異なる薬剤をローテーション散布する。



幼虫



成虫



ネギえそ条斑病感染葉  
○えそ条斑  
○ネギアザミウマの食害痕

## 11. ネギ ネギハモグリバエ

予報内容 発生量：平年比 やや少ない（前年比 やや多い）

### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 幼虫が葉肉部分を加害し、白い筋状の食害痕を残す。
- (2) 被害葉及び収穫残さが発生源となるので、残さは一箇所にまとめて積み上げ、表面をビニルで被覆する等適切に処分する。
- (3) 1葉あたり1～数匹の幼虫が加害するバイオタイプA（従来系統）とは異なり、10匹以上の幼虫で集中的に加害し、葉を白化させるバイオタイプB（別系統）の発生を確認しているので注意する。



幼虫



成虫

